

「ともにつくるミライ」

上下中学校区学校再配置推進委員会だより

NO. 4

令和8年5月29日（金）
上下中学校区学校再配置推進委員会
（お問合せ）
事務局：府中市教育委員会
教育政策課 教育推進係
TEL（0847）44-9023

第4回上下中学校区学校再配置推進委員会を開催しました。

令和8年5月11日（月）14時から上下南小学校において、第4回上下中学校区学校再配置推進委員会を開催しました。各部会からの報告事項を受けた後に、PTA・CS部会から地域交流拠点（CSルーム）設置の提案があり、委員研修として「子ども、地域、学校の交流を創出する拠点について」というテーマで、学校にCSルームを設置する意義や、子ども・地域に与える影響などについての熟議を行いました。

グループ協議・発表を行った後、推進委員会委員長の京都産業大学の西川信廣名誉教授からご講評いただき、学校に交流拠点があることのメリットや、地域の人と子どもの交流の必要性について学びました。

今回の委員会では、地域交流拠点を学校に設置することの課題や不安な点も多く挙がりましたので、設置をするかどうかも含めて各部会に持ち帰り、協議を重ねていきたいと思います。

部会からの報告事項について

PTA・CS部会	学校経営部会
・保護者交流事業について、9月に合同参観日、2月に合同臨時総会があるが、その間に1～2回程度、PTA主催で交流会を企画する。 ・地域と子どもとの交流の機会が少ないと感じている。学校に交流拠点（CSルーム）が出来れば、交流のきっかけづくりになるのではないか。（委員会へ提案）	・交流事業について内容の見直しを行った。学級活動の中で、学級旗や歌を作る取組みをしたいと考えている。新しい学校になったときにつながりが生まれるようにしたい。 ・新上下北小学校の学校教育目標案について、「やってみよう、つながろう、ともに未来へ」にしようと思っている。

部会からの提案事項について

地域と子どもが交流できる拠点の設置（CSルーム）を提案したい。

前回の推進委員会の中でも話があったが、地域住民と子どもとの交流が薄れている。交流の場をもととしても、子供がいない地域もある。それならと、学校に子ども達の顔を見に行こうと思っても、学校を訪れる敷居は高い。

昔は、上下町にも5つの小学校があって中学校があって、子どももたくさんいて、賑やかだった。それが、今や小学校は1つになろうとしているし、その先、小学校と中学校が一つになって、上下学園になろうとしている。上下学園になる時には、学校に地域の人が入って、子ども達と交流できるような専用のスペースが出来ることを期待している。専用のスペースを行政に用意してもらうには、取組みを始めていくことが必要である。

今の上下北小学校では、専用のスペースを設けることは難しいかもしれない。すぐに色々な人が来るという事も難しいかもしれないが、「つながるきっかけづくり」として、地域交流拠点（CSルーム）の設置を提案する。

委員会・部会の開催予定

- 【第3回 生徒指導部会】 6月10日（水） 15:30～ 上下中学校
- 【第2回 総務検討部会】 6月25日（木） 19:00～ 上下町民会館
- 【第5回再配置推進委員会】 7月8日（水） 13:30～ 上下北小学校

【熟議テーマ】「子ども、地域、学校の交流を創出する拠点について」

各グループで出た御意見（抜粋）

グループA（町内会）

- ・学校で地域との交流をもつべきなのか、地域の課題ではないのか。
- ・学校に交流拠点が出来たとして、地域の人が学校まで来てくれるのか。学校の再配置などで学校との物理的な距離も遠くなっている。地域に子供が1人か2人しかいないところもある。そういった人は学校になかなか来ないのではないか。
- ・例えば将棋などで、プロ級の人に来るくらい話題性が無いと足を運んでもらう事は難しいと思う。

グループB（CS）

- ・CSルームという名前ではなく、もっと温かみのある名前にした方が馴染みやすいと思う。
- ・いろいろな課題があるが、作らないと前に進まない。1人でも2人でも学校に来てほしい。
- ・最終的には、公民館や支所、福祉施設など一緒になって複合施設になっていくと思う。そこに交流の場があることは大切だと思う。

グループC（学校）

- ・学校は地域の教育力を必要としていて、地域と子供たちの交流については必要。
- ・学校に来てもらう敷居を下げることは大切だが、下げ過ぎると防犯上のリスクがある。
- ・交流拠点に常駐で誰かがいてくれると安心。

グループD（保護者）

- ・不特定多数の人が、学校に入ってくることは危険であり、そういった取組みが必要なのか疑問を感じる。子どもの教育活動に関わる等、学校に来る目的を持ってくるのであればよいと思う。
- ・おじいちゃん、おばあちゃんと同居ではない家庭も増えている。上の世代との交流の必要性は感じる。子ども達が色々なことを体験できる場になれば良い。



【教育長メッセージ】

今回で第4回目となった委員会では、PTA・CS部会より地域交流拠点（CSルーム）設置についての提案がございました。委員研修の中で熟議を行ったところ、「核家族化が進む中、上の世代との交流はありがたい。」「将来を見据え交流の場は必要。」といった意見が出る一方で、「どんな人が来るか分からないから防犯上のリスクがある。」「地域交流の拠点を学校が担うのは学校に任せ過ぎではないか。」といったような課題も挙がりました。

第2回の推進委員会の中で、西川名誉教授が、この街（上下）の教育の強みは「子どもが多くの人に愛される経験ができること」にあるとおっしゃりました。地域交流拠点が学校の中にできるという事はまさしく、子ども達が地域の多くの人と交流し、大切にされているということを実感する機会を増やすことができる、上下地域の強みを活かすことのできる取組みではないかと思います。

また、地域交流拠点を学校に設置することは、教育や地域課題の解決をすべて学校が担うことになるわけではありません。子ども達がこれからの時代を生き抜いていく力を付けるために、地域のみなさまのお力を借りながら、新たな学校で、こういった教育を展開していくのかを一緒に考えていきましょう。



京都産業大学 西川名誉教授の講評（概要）



コミュニティ・スクールという言葉ですが、日本では「地域運営学校」と呼ばれています。

でも、最初からそうだったわけではありません。

もともとはイギリス型のコミュニティ・スクールの考え方を参考に、日本に導入されました。

イギリスでは、学校ごとに教員を選ぶことがあります。

地域が「この学校にはこういう先生が必要だ」と考え、学校単位で教員を集めるんです。

それはとても魅力的に見えます。

例えば、「この地域を大切に思い、この学校で働きたい」という先生が集まるわけですから。

ただ、現実には課題もありました。都市部には人が集まるけれど、地方やへき地では応募者が来ない。だから日本では、人事権までは学校にもたせず、「日本型コミュニティ・スクール」として制度化されました。

つまり、日本のコミュニティ・スクールは、「地域が学校を支え、学校と一緒に子どもを育てる仕組み」なんです。

では、「地域」とは何でしょうか。私は、地域とは単なる地図の範囲ではないと思っています。年齢も立場も関係なく、みんなが自由に話し合える関係性。それが地域の本当の意味ではないでしょうか。保護者だから偉い、自治会長だから偉い、学校の先生だから特別。そういうことではない。子どもを中心にして、「一緒に学びたい」「一緒に考えたい」そう思う人が集まるのが大切なんです。

だから学校運営協議会も、「役職で座る場」ではなく、「学びたい人が集まる場」であってほしいと思っています。

そこで大事になるのが、総合的な学習の時間です。例えば、上下町には「分水嶺」がありますよね。川の水が南へ流れるか、北へ流れるかを分ける場所です。これって、実はすごく面白い教材なんです。自然科学にもつながる。地理にもつながる。歴史にもつながる。「なぜここが分水嶺なのか」「この土地はどうできたのか」そんなことを調べていくと、地域のことがどんどん見えてくる。そこに地域の方が入ってくるんです。詳しい人が教えてくれてもいいし、「実は自分も知らなかったから一緒に学びたい」でもいい。そうやって、子どもだけじゃなく、大人も一緒に学んでいく。私は、それがコミュニティ・スクールの姿だと思っています。だから、「地域の人が学校の中に自然に集まれる場」をつくるのが大切なんです。

そこに行けば誰かがいる。ちょっと話ができる。子どもたちの様子が見える。そんな場所があるだけで、学校と地域の距離は変わります。もちろん、最初はいつものメンバーかもしれません。でも、テーマを変えたり、発信を工夫したりすると、新しい人が来ることがあります。

「今度は何をやるの？」

「ちょっと行ってみようかな」そういう小さな動きが、地域を少しずつ変えていくんです。

私はよく、教師は「風の人」、地域の人「土の人」だと言います。教師は異動します。新しい知識や考え方をもって、地域に風を運んできます。でも、地域の人はその土地に残る。土として地域を支えていく。風が土を豊かにし、豊かになった土が子どもを育てる。それが学校と地域の関係なのではないでしょうか。

今、日本全体が人口減少や高齢化の中にあります。地域には様々な課題があります。

だから、「学校だけで全部解決してください」という話ではありません。

防災も、高齢化も、地域づくりも、本来は行政全体で考えるべき課題です。

でも、その中で学校ができることがある。それは、「子どもを真ん中にして、人がつながる場をつくること」です。

コミュニティ・スクールに正解はありません。

東京には東京の形がある。上下には上下の形がある。

府中市には府中市の形がある。

だからこそ、自分たちの地域に合った形を、みんなで考えていけばいいんだと思っています。